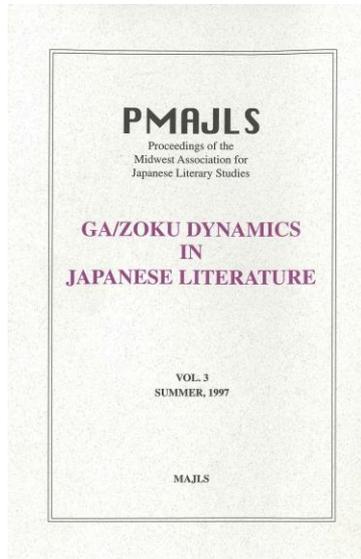


雅俗と虚構－蕪村の場合における覚書－
“Ga/Zoku and Fiction: Notes on the Case of Buson”

揖斐高 Ibi Takashi

*Proceedings of the Midwest Association for
Japanese Literary Studies* 3 (1997): 49–52.



PMAJLS 3:
Ga/Zoku Dynamics in Japanese Literature.
Ed. Eiji Sekine.

雅俗と虚構 — 蕪村の場合における覚書 —

揖斐 高
成蹊大学

安永六年（一七七七）、六十二歳の蕪村は、亡き門人召波との交遊を回顧しながら、その遺稿集『春泥句集』の序文を記した。蕪村の俳論として名高い離俗論が展開される文章である。生前の召波に俳諧の要諦を尋ねられた蕪村は、「俳諧は俗語を用ひて俗を離るるを尚ぶ。俗を離れて俗を用ゆ。離俗の法、最もかたし」と説き、そのための近道として、「詩を語るべし。子もとより詩を能くす。他にもとむべからず。……画家に去俗論あり。曰く、画の俗を去ること他の法無し、多く書を読めば則ち書卷の気上升し、市俗の気下降す、学者其術を慎め哉と。それ画の俗を去るだも、筆を投じて書を読ましむ。況や詩と俳諧と何の遠しとする事あらんや」と教えたというのである。

ここで蕪村のいう「俗」とは「市俗の気」、すなわち日常生活的な卑俗さを意味しているが、その対極には、「書卷の気」すなわち古典的な書物が体現する風雅というものが想定されていた。このように雅と俗とを対立的な価値概念として定立し、庶幾すべきプラス価値としての雅、排除すべきマイナス価値としての俗という座標軸の中で、文学や芸術の在り方を捉えようとしたのが、いわゆる雅俗論である。

こうした雅俗論の淵源を遡れば、儒学的な尚古主義に到達する。しかし蕪村の場合は、直接的には十八世紀半ばの漢詩壇に流行した古文辞派の詩論との関連が、まずは考えられるべきであろう。蕪村が私淑した服部南郭など当代の古文辞派の漢詩人たちは、宋の嚴羽の詩論『滄浪詩話』に、「詩を学ぶには先づ五俗を除く」などとあるのに拠りながら、漢詩における雅俗を厳しく弁別し、俗を排除することによって、風雅の器としての漢詩を完成させようと試みていた。冒頭に引いた蕪村の序文中の「詩」とは、いうまでもなく漢詩を意味している。蕪村は漢詩を学ぶことによって、俳諧にも雅俗論を適用し、芭蕉以後低俗化していた俳諧の質の向上を図ろうとしたのではなかったかと思われる。

しかし、当代の人々にとっては、漢詩や和歌が本来的に雅の文学様式であったのに対し、俳諧はあくまでも俗の文学様式であった。文学が言語表現である以上、雅語に拠るのが雅文学であり、俗語に拠るのが俗文学であるという基本的な枠組みだけ

は否定できない前提として存在したと考えねばならない。であるとすれば、俗文学の俳諧に雅俗論を適用するとしても、俗語表現の排除という方向へは向かうべくもない。俳諧における雅俗論の適用は、必然的に素材や趣向の領域に向かわざるをえないことになる。蕪村が「俳諧は俗語を用ひて俗を離るるを尚ぶ。俗を離れて俗を用ゆ」と述べたのは、そういう意味である。蕪村は素材や趣向に、どのようにして雅を採り入れ、それをいかにして俗語で表現するかということに腐心したのである。そのような、素材や趣向に雅を採り込むための方法として蕪村が召波に提示したのが、漢詩を学べ、書物を読めということであった。日常生活的な卑俗さを離れた風雅の世界というものはどこにあるのか。その具体相をもっとも端的に体現しているものは歴史（史書）である。俳諧の素材や趣向における雅を庶幾した蕪村が、和漢の史書や歴史物語や故事集などに取材した句を多く作るようになるのは、必然的な成り行きであった。

次に示す例は、一句を成立させている基本的な趣向に、歴史的な事実や故事が採り入れられている句である。

川狩や帰去来といふ声す也	(陶淵明)
徹書記のゆかりの宿や玉祭	(正徹)
宗任に水仙見せよ神無月	(安倍宗任)
秋風の呉人はしらじふくと汗	(張翰)
易水に葱流るゝ寒哉	(荊軻)
菓盗む女やは有おぼろ月	(嫦娥)

括弧内に示した歴史上あるいは伝説上の人物にまつわる故事が、それぞれの句の季題のイメージを豊かに彩っている。

そして、次に掲げる句などは、句の趣向の一部として歴史上の人物をめぐる故事を採り入れるに止まらず、歴史上の人物そのものを一句の主題として取り上げた（もちろん発句である以上季題との組み合わせはあるが）、いわゆる詠史の句になっている。

人丸は月に休まぬ姿かな
 負腹の守敏も降らす早かな
 しぐるゝや長田が館の風呂時分
 蟋蟀や相如が弦のきるゝ時
 藻の花を分て許由が手水哉
 白楽天桜も見ずにいなれけり

これらの句では、作者蕪村は、句の表現世界の外部に自らを置いている。蕪村は現在から、過去の歴史上の人物の姿や行為を

眺めるという視点で、これらの句を詠んでいる。

ところが、次のような句においては、作者蕪村は必ずしも句の世界から離れた客観的な位置に己を置いているわけではない。むしろ、作者自身が句の舞台になっている歴史上の一場面に立ち会っているかのごとき表現になっている。つまり、作者の視点が句の世界の外部にではなく、句の世界の内部に設定されているように読みとれるのである。

ゆくはるや同車の君のさゝめごと
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉
玉霰漂母が鍋をみだれうつ
指南車を胡地に引去る霞哉
のり合に渡唐の僧や冬の月
揚州の津も見えそめて雲の峯

たとえば「ゆくはるや」の句は王朝物語の世界、「鳥羽殿へ」の句は『保元物語』『平治物語』という軍記物の世界、「玉霰」は『蒙求』（漂女進食）の世界である。いずれも古典的な書物の中の世界、すなわち雅の世界が舞台になっていて、蕪村が生きている十八世紀日本の現実の世界、すなわち俗の世界が舞台になっているわけではない。これらの句では、非現実の世界の内部に作者の視点が設定され、いかにも作者の現実の経験であるかのごとくに、それら非現実の世界が表現されている。つまり、これらは虚構の句として構成されているのである。

結局、蕪村は俳諧に雅俗論を適用することによって、俳諧における虚構の可能性を大きく切り開いたと言えるのではないかというのが、この覚書の骨子である。それは蕪村に大きな影響を与えた服部南郭など日本の古文辞派の詩人が、雅俗論を基底に、盛唐詩の世界を模倣再現することで、浪漫主義的な虚構の漢詩世界を切り開いたのと通底する現象であったように思われる。

しかし、蕪村俳諧における虚構の問題は、実はこうした雅俗論との関係だけで考えられるほど、単純なわけではない。たとえば蕪村には、次のような虚構の人事句も少なくない。

離別れたる身を踏込で田植哉
負まじき角力を寝ものがたり哉
我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴らす
討はたす梵倫つれ立て夏野かな

これらの句には、歴史上の事実や故事は関わっておらず、したがって雅俗論とも無縁であると言わねばならない。蕪村俳諧に

おける虚構論は、総合的・最終的にはこの種の虚構の人事句をも視野に入れた問題として考えられねばならないと思うが、それにしても、その重要な一面に雅俗論の関わる部分があることを強調しておきたいと思う。

Excerpt

“Ga/Zoku and Fiction: Notes on the Case of Buson”
Ibi Takashi (Seikei University)

In the preface of his last anthology, Shundei kushū, Buson concludes that the ideal spirit of haikai resides in the use of zoku language in order to create something free from vulgarity intrinsic to the zoku reality. Additionally, he stresses the importance of learning from Chinese poetry in order to develop a higher haikai spirit. Buson finds a way to create poetic elegance in haikai by developing topics and visions that refer to classical poetic/intellectual tradition in China and Japan. For this reason, he not only utilizes historical heroes and legendary episodes as topics of his poems but also creates romantic classical visions, in which the poet imaginarily participates: In his poetically recreated past, he hears the Heian nobleman's whisper and urgent steps of horses in a Heike monogatari-inspired scene, and views a long war troupe's march in an open plains in classical China, and so forth. The search for classical ideals thus leads Buson to the creative use of fictive imagination.

Such imaginative creativity in Buson is, however, not exclusively associated with his classicist search for ga aesthetics: it is also applied to snapshots of his own time: see, for instance, a poem about a rice-planting woman who was just divorced, in which the poet psychologically identifies himself with her. The issue of fictionality in Buson has thus a complex context, but his search for ga through zoku language/reality plays a most important role in his development of fictive imagination.